

1

Playing with the Man

著：日間

3 for long!

沈みゆく夕陽を追いかけ、もしも抜き去ることができたなら。そこにはどんな景色が広がっているのだろう。

マヤノトップガンというウマ娘は、トゥインクル・シリーズ「最初の三年間」を駆け抜けた末に、その地平へと至った。彼女が得た答えは、その走りを見た者にも、あるいは伝わるかもしれない。常にまばゆい太陽と並走しているかのような、そんなキラキラとした彼女の走りを、夕陽を追い越して、そこから新たな日の始まりだとばかり、彼女はなお走り続ける。輝ける足跡を刻みながら、今日も駆け続けている。

その日の朝は、ことさらに世界がまばゆく感じられた。寮の自室で窓辺に立ったマヤノトップガンは、カーテンを開いた向こうに広がりつつある春の曙光に目を細めながら、大きく伸びをした。遙かな空を飛行機雲が斜めに伸びていくのを見つけ、耳をぴくりと跳ねさせる。

「マヤノ……？ 今日はずいぶん早いじゃん」

ひと足遅れてベッドから降りてきた同室のトウカイテイオーが、射し込む光に目をこする。マヤノトップガンは眠気などかけらも残していない顔で振り返って、笑いかけた。

「おはよ、テイオーちゃん。こんな日に寝坊してちゃ、もったいないよ」

「こんな日って——ああ」

トウカイテイオーの寝ぼけ顔に得心の色が浮かぶ。今日が、トレセン学園・春の感謝祭その

日であることを思い出したのだ。表情が苦笑に変わった。

「それで張り切ってるの？ おこちゃまだなあ」

「むーっ、マヤはもうお子様じゃありませんー。今日だって一日、トレーナーちゃんと大人のデートするんだもん」

「そういうところが子供なんじゃないかなー。だいたい一日中つて、マヤノも競技か何かに参加登録してたじゃん。さぼっちゃダメだよー？」

呆れ気味なトウカイテイオーの声が、もはやどれほど耳に入っているのやら。マヤノトップガンは上機嫌で鼻歌など奏でながら、制服への着替えにかかった。

トレーナーと感謝祭で遊べるのが楽しみなのは本のだが、彼女が胸を高鳴らせているのはそれだけが理由ではない。今日は他にも、素敵な何かと巡り合えるような予感があるのだ。レースの中で先の展開が「わかる」ときのものにも似た確信が、彼女の中にはあった。

窓の外に向き直れば、飛び去った飛行機の残した雲が、空の色に淡くにじみ、消えようとしていた。

午前九時。心得のあるウマ娘有志によって奏でられた高らかなファンファーレを合図として、春のファン感謝祭は開幕と相成った。

ゲートオープン。正門が開放され、早いうちから外に集っていた訪問客たちが一斉にスター

トを切った。感謝祭の実行委員に誘導されながら、秩序立った足並みで中へと吸い込まれていく。

平素であればトレセン学園制服の董色ばかりが行き交うキャンパスに、この日は老若男女さまざまな来訪者たちの多様な色が入り混じり、広がっていく。ある者ははじめから目的を決めているのか足早に、またある者は無計画そうなのんびりした足取りで、思い思いの方角へと散っていく。

迎えるは生徒たちによる様々な出し物の案内に、立ち並ぶ屋台の呼び声。そこに訪問客たちのざわめきが溶け合って、構内は早々に喧噪で満ちようとしていた。この春空に似て陽気で、和やかで、奔放な、暖かい騒がしさ。

——ところが、そこにほんのかすかながら、不穏な雑音が生じたのだ。

「ええーっ！ 逢えないってどういうことー!？」

浮かれた足取りで寮を出て、取り決めてあった担当トレーナーとのランデブー地点へ向かうとしていたマヤノトップガンは、携帯電話へ不意に届いたメッセージを開いて、尻尾を逆立てた。

それはトレーナーからのもので、落ち合うのを一旦、見送らせてほしいという謝罪交じりの内容だった。なんでも、来客に乗じて不審者が侵入した疑いがあるとかで、手すきの職員や教

官、それにトレーナーなどが調査・事実関係の確認に駆り出されることとなったというのだ。

「領空侵犯機って、また笹針のおねーさんかな？」

過去に保健室でエンカウントした、いかかわしき溢れるマスクと白衣をまとった女性の姿が脳裏をよぎる。しかしメールの続きを追えば、今回は別人物らしい。対象は成人男性の模様、とそこには記されていた。

まあ、どちらでもよろしい。いずれにせよ、マヤノトップガンからしてみればトレーナーとの蜜月を邪魔するにつくき敵性存在に変わりはない。最悪、デートがお流れにさえなってしまうような危機に「そんなのやだやだ」とひとしきり地団太を踏んだ後、彼女はある考えを脳裏に閃かせた。

「こうなったら、マヤがその所属不明機を撃墜しちゃえばいいんだ！」

厄介ごとをさっさと片付けてしまえば、遊ぶ時間はいくらでも取り戻せる。それに解放されたトレーナーが、問題解決の功労者としていっぱい褒めてくれるかもしれない。想像すると頬が緩んできた。

トレーナーからのメールには「対象は校舎の方に向かったらしいのでマヤノは近づかないように」という記述もあったので、当座の行き先は決まった。彼女は本館入口へと機首を向けると、緊急出撃スケランブルしたのである。

2

あなたの1着になりたい

著：藤村流

3 for long!

「ネイチャ……好きだ……」

気が付いたらトレーナーに熱っぽく言い寄られていた。

ネイチャは焦った。

ネイチャのトレーナーといえば、朴念仁を絵に描いたようなスポ根人格であることは周知の事実なので、目を逸らす余裕もない近距離で詰め寄られると困惑するしかない。あまりにも見慣れた顔が少しずつつ近付いてくる。同じ速さでゆっくり後ずさっていると、いつの間にか壁に追い詰められていた。もう逃げられない。困った。

「と、トレーナーさん……?」

「ネイチャ……」

もはやそれしか発言する気がないと見える。

声が、息が近い。心臓がばくばくしているのはトレーナーの方なのか、自分の心臓の鼓動がうるさくてネイチャには判断できなかった。顔も熱いし。汗も掻いている気がするし。大変だ。
「ちよ、ちよい待って……アタシもさ、準備つてもんがさ……」

「ネイチャ……」

「ええい、それしか言えんのか……!」

強がってはみるものの、襲い来るトレーナーを避けようという発想はない。

「え、ええ……? あ、このままだと、そーいうことになっちゃいますけども……」

無言。吐息。

熱が暴走し、感覚が交錯する。どちらの体温か、どちらの感情か、判然としないまま肌が近付き、やがて視界が狭まる。

(あっ……、……)

ネイチャは目を閉じ、何かを覚悟した――。

そして目が覚めた。

「……………あほくさ」

静かに吐き捨てるネイチャは汗だくであった。身体もやけに火照っている。理由はわからな
い。徐々に近付いてくる顔なじみの爽やかスマイルが何故か脳裏に焼き付いているけれど、そ
れはネイチャが常日頃から彼の笑顔を思い浮かべているからで、別に夢の中で壁ドンじみたキ
ス待ち顔を晒していたからでは断じてない。

でも日常的にトレーナーの笑顔を思い浮かべて身体を火照らせている方がよっぽど問題です
ね、とネイチャは頭を抱えた。一体何のために自分に言い訳をしているのか。恥ずかしい。恥
ずかしすぎるとしか言いようがない。

「……………」

ベッドの上で膝を抱えて、顔を埋めてひとしきり唸る。同室のマーベラスサンデーはすやす

やと眠っている。

いい加減、何とかしなければ。告白とまではいかないとしろ、関係を進展させるような一手が欲しい。正直、あのトレーナーと自分のことだから、なんとなくあなあのままでも大丈夫なのだろうけど。失敗した時の気まずさを考えれば、この関係を壊したくない、と零していた数多のトレーナー好き好きウマ娘たちの気持ちも痛いほど理解できる。

それでも。

「……たすけてくれ……」

呻きながら携帯端末をぼちぼちする。

この思いはとても一人では抱え切れない。きつと、相談相手にはひとしきりからかわれるだろうけど、それもやむなしと思える程度には、ネイチャも素直になったつもりでいた。

「……はあ。まだ告白してなかったのですか」

「ぶほおっ」

むせた。

「えーそうなの？ てつきりもう付き合ってるんだって思ってたよう」

ツインターボはストローでニンジンジュースを飲んでる。すごい勢いだ。

イクノディクタスとマチカネタンホイザに鋭い指摘を受け、ネイチャが咳き込んでげげほ

している間に、イクノは状況を細かく分析していた。イクノの大きな眼鏡も輝きを増す。

「突然呼び出された時は何事かと思いましたが。結局いつものことでしたね」

「ちよつと、呆れるのやめてよ……これでも傷付くから……」

「そうだよ、ネイチャだって頑張ってるんだから。具体的には思い浮かばないけど」

「ぐっ……」

ぐうの音も出ない。

「ジュースおいしい！ おかわり！」

ターボは今日も元気である。ずつとそのままのターボでいてほしい。

「はいはい……。店員さん、ニンジンジュース追加でー」

「ありがとうネイチャ！」

「いいってことよ。日頃から世話になってるし」

「まあそうだな、ネイチャのことはいつも面倒見てるからな！ なんていうか、トレーナーに声を掛けたそうにしている時、ターボがトレーナーにどーんって突っ込んでいって、話しかけやすいようにしたこともあるし！」

「うげっ……あれってそうだったんか……」

「私が作戦を立てました」

「んな野菜の生産者表示みたいに言われても……」

3

サボテンの残骸 × 貝の亡骸＝春の食材

著：りふい

3 for long!

ある晴れた日の昼下がり、寮の一室から響き渡った悲鳴は多くの者が聞いていた。ある者は事件かと椅子から立ち上がり、またある者は何かあったかと首を傾げる。しかしすぐに悲鳴の主がエルコンドルパサーであると判明すると、皆々またかと苦笑して自分の時間に戻っていた。彼女が調子に乗って事を起こして同室者に武力鎮圧されるのは既に寮の日常茶飯事であり、特筆すべきことではないからだ。

もしもこの時彼女らの部屋の様子を見に行つた者がいたならば、それは珍しい光景が見れたであろう。悲鳴から一分後、エルコンドルパサーは自室のベッドに腰かけて深いため息を吐いていた。その眼下にはグラスワンダーが困つたような表情で床に正座している。後頭部に大きなたんこぶが出来ているのは、悲鳴と共にエルコンドルパサーが放つたバックドロップのせいである。少し悪い事をしたかと反省しかけた怪鳥は、しかしライディングデスクの上にある被害者を目にして遠慮は無用と割り切つた。

「ねえグラス」

「はい」

「あれは……何デース？」

グラスワンダーはエルコンドルパサーの視線を辿つて同じ机に目を向ける。そこには先ほど親友にバックドロップと同時に取り上げられた鉢植え、サボテンが鎮座していた。この鉢植えは春の風物詩として、エルコンドルパサーがグラスワンダーの育てている花と並べて飾ってい

たものである。その生態としてほぼ放置してもいいサボテンは、性格上まめなグラスワンダーが自分の鉢と共に管理していた。

「まだ刺抜きの途中なんですが」

「いや抜かないで!? 枯れちゃうデシヨ」

「これから食べる物に対して枯れるも何も……」

「食べないでヨ。あとちよつとで花も咲いて実もつきそうデスヨあれ」

実質このサボテンはエルコンドルパサーからグラスワンダーに送られた物であると言ってよい。それは二人の間で共通の認識であつたし、エルコンドルパサーにしても今更所有権を主張する心算もない事である。しかし風情を感じるために飾った鉢植えが非常食にされようとなつては、言いたいことも出て来るものだ。さらに実食する場合調理するのが自分となればなおさらのことである。

エルコンドルパサーはグラスワンダーの奇行の原因であろう空腹には思い当たるところがあつた。季節は春から初夏になろうかというこの季節、春レースの締めくくりとなる宝塚記念もまた差し迫つてきた時期である。そこには世間においてグランプリの覇者として名高いグラスワンダーも出走が予定されている。そして走るからには勝たねばならず、その為のコンディション作りは欠かす事の出来ない作業であつた。

「もしかして減量、ヤバイデース?」

「そんな事はありません」

「目を見て話そうよグラスウ……目安目標まであと何^キヨ？」

「後……後2^キ程……」

「2かあ」

グラスワンダーはウマ娘全体の平均で言えば小柄な方と言っている。さらに元々太っているタイプではない為、最後の2^キ3^キを削ぎ落すのが難しい。

体質的な部分で同情しなくなった怪鳥であるが、元々二人に共通のトレーナーである東条ハナはグラスワンダーに過度の節制など求めている。管理統制が非常に厳しいように見えるリギルであるが、その実トレーナーはウマ娘至上主義者である。思春期の少女達に健康を害するような減量をさせることは無く、アスリートとして必要なラインを要求しているだけだった。

やはり原因は親友にあると心を鬼にして接するエルコンドルパサー。

それはそれとして……

「とりあえず、グラスが頑張つてあの棘が殆ど残つてないサボテンはステーキにしちやおうか」

「お願いします」

心を鬼にするのは明日からにして、今日は甘やかす事にした。

エルコンドルパサーが用意したサボテンは食用にもなるウチワサボテンである。そのために

今回のような悲劇が生まれたが、食用サボテンとは高栄養低カロリーとあってアスリートにはありがたい食材でもある。こうなったらいつそのこと、グランプリを控えた親友にふるまってしまうのも良いはずだ。

そんな理論武装をしつつサボテンのステーキを提供するエルコンドルパサー。飢餓感から解放されたグラスワンダーは幸せそうに親友の手料理を堪能しつつ醜態を見せた事を詫び、半ばは無駄と諦めつつも一応口止めしておいた。

エルコンドルパサーは良い笑顔で首を縦に振ったものの言質を取られるようなことは言わない。

「今回はそんなにギリギリなんデース？」

「そうですね。主に冬の間に、誰かさんに暴食させられたせいなんですが」

幸せそうな顔から一転して半眼になった親友に苦笑するエルコンドルパサー。

実の所グラスワンダーは大変おっとりとした満腹中枢を備えており、食事によって満足を得るまでに大変多くの食材を必要とする、ぶっちゃけ大食いの部類に入るウマ娘の一人であった。その細身の体でどこにそれだけ詰め込めるのか、気にならぬ者はいないだろう。そして当然四六時中一緒にいるルームメイトあるエルコンドルパサーもその一人。

怪鳥の好奇心は去年最後の大舞台、有馬記念の後に爆発した。

1年のレースを締めくくると有馬記念まで気を張り詰めていたグラスワンダーが、春の戦いに

4

トレセン学園雨模様

著：栗藤

3 for long!

午後の授業中、ライスシャワーの耳がぼつぼつと雨粒が窓を叩く音を捕らえた。

つい、と視線を窓の外に走らせると、午前中は晴れていた空が厚い雲に覆われていて雨が降り出していた。

やっぱり降り出した、と小さくため息をついて、教科書に視線を戻す。

朝にチェックした天気予報では降水確率は決して高くなかったが、校外を走れば赤信号に捕まり工事現場に出くわす間の悪さを自覚しているライスシャワーは、しっかり鞆の中に折り畳みの傘を準備している。

その点では対策が実って良かったと言えたが、降り出した雨が練習用グラウンドのコンディションを悪くすることが、ライスシャワーの気分を沈ませた。

もう一度窓の外に視線をやると、雨はより勢いを増していて、雲も黒さを深くしているようにライスシャワーには思えた。

これは、今日のトレーニングは屋内練習に変更か中止かな、と考えを巡らせる。

トゥインクルシリーズのレースは基本的には雨でも開催されるため、雨天練習が行われることもあったが、ウマ娘の体調に与える悪影響もあるため頻度は多くないし、この日のような急な雨の場合は準備も整っていないので屋内練習も場所の確保が難しく、練習自体が中止になって休養にあてられることも珍しくなかった。

今日は同級生でクラスメイトのミホノブルボンとの並走トレーニングが予定されていたから、

ライスシャワーはとても楽しみにしていたのだ。

同じ授業を受けているミホノブルボンを見やると、いつもの無表情でノートに目を落として握ったシャープペンシルを動かしていた。

こんな日に限って雨が降るなんて、とライスシャワーは自身の不幸体質に対して、もうひとつため息をつくのだった。

放課後。

雨は結局降り止まず、ライスシャワーの予想した通りこの日の練習は中止になってしまった。担当トレーナーから練習中止を申し渡されたライスシャワーは、教室で待っているミホノブルボンにそのことを伝えに戻る。

頭の上の耳をしょんぼりと力なく垂らせたライスシャワーが教室のドアを開くと、窓際の席に座っていたミホノブルボンと目が合った。

「どうでしたか？」

「えっと……、その、やっぱり今日は練習はお休みだった」「そうですか」

いつものように、起伏の無い返答には落胆の色は感じられない。

そのことがかえってライスシャワーの気分を沈ませた。

「屋内練習場もいつぱいだってお兄さまも言ってたよ」

「そうでしょうね、急な雨でしたし」

「うん、だからライスは早めに寮に帰ろうと思ってるんだけど……」

そう言って、ぐっと腹に力を入れる。

良かったら、一緒に帰りませんか。

そう言おうとしたのだが、ミホノブルボンの青く澄んだ瞳を向けられて思いがけず別に言葉が出てくる。

「ブルボンさんは……どつ、どうするの？」

ライスシャワーは内心大慌てだ。

ここでどうするのと聞いて何になるのか。

ライスのバカ！

と、混乱気味のライスシャワーに、ミホノブルボンは思いがけない反応をする。

一度窓の外空に視線を向けて、数秒。

そうしてライスシャワーに向き直る。

「実は、今日は傘を持ってきたくないのです。しかし空模様から計測したこの後雨が止む確率

は低く、走って栗東寮に戻った方が良いかもしれませんが、可能性は低くともゼロではありません。つまり、雨が止むまで待つべきか迷っています」

ミホノブルボンの言葉にライスシャワーは一瞬面食らったような表情を見せるが、身を乗り出すようにして胸の前で両の拳をぎゅっと握った。

「そっ、それなら！」

ミホノブルボンは驚いた様子も見せていない。

「ライス、折り畳みの傘を持ってるの！ きよつ、今日だけじゃなくてね、ライス良く雨に降られるから、いつも鞆の中に入れてあるの。だから、今日もあるの」

「そうですか」

「うん！ だから、だからね」

「はい」

「ライスがブルボンさんを栗東寮まで送っていくよ！」

ライスシャワーの勢いにもミホノブルボンは感情の動きを見せていない。

ライスシャワーが不安になる程度の沈黙が二人の間に覆いかぶさる。

先に沈黙を破ったのはミホノブルボンだった。

「……止めておいた方が、良いのではないのでしょうか」

「そ、そっか。やっぱり迷惑だったよね、ごめんね」

5

見たことのない景色は常に前

著：河瀬圭

3 for long!

* 1 *

トレセン学園、チーム・スピカに割り当てられた一室でサイレンススズカは困った表情をしていた。

「ええとスベちゃん、それは……」

「私、昔のスズカさんも知りたいんです！　もしかしたらその中にスズカさんみたいに走れる方法があるかもしれないじゃないですか！」

黒髪に一房の白い前髪、ショートボブの髪型を揺らしながらスペシャルウィークは両拳を握りしめている。日本一のウマ娘になると息まいてスズカの背中を追うようにスピカ入りを決めた彼女の視線をスズカは直視できなかった。

視線を彼女の上にさまよわせ、思案しながら周囲を見る。

「ボクも知りたいなー。リギルって厳しいって聞くけど内情はよく知らないんだよね、どんなトレーニングしてるのか、とかさー」

「私はリギルについてある程度聞いておりますけど、他チームの内情を漏らすのはどうかと思えます……ですけどスズカさんのリギルの時と、今の違いというのは興味がありますわね」

のんびりと、でも顔には「リギルにいるシンボリドルフの事が知りたい」と書いてあるようなトウカイテイオーと、親族が所属してるだけに思案顔のメジロマックイーンがやんわりと

スペシャルウィークの援護をしてくるのを見ながらスピカに移る理由になったトレーナーに話してもいいのかと視線で問う。

「……お前ら食べ過ぎだ……オレの……給料……」

ウマ娘雑誌を顔に乗つけたトレーナーは寝言で返事を返してきた。アテにならない時はとことんアテにならないトレーナーに溜息が出そうになる、ホントにこの人はしっかりした人がついてないとダメなんじゃないかと心配になるが、ウマ娘を見る目は本物だと思うからどう判断したものかわかりにくい。

「やめとけやめとけ、いちいち他人の過去を詮索してもオモシロくねーぞ。ところでこの後なんだが遺跡探索のための筏を作るんだけど、マックイーン、強制参加な」

碁盤にパチリと将棋の駒を置きながらゴルドシップの声がする。

相変わらず理解が及ばない気分屋であるが、スピカの中では最もトレーナーと付き合いが長いので、彼女の言う通りかもしれない。

それに、リギルにいた頃の自分をスズカはあまり良く思っていないのを後押ししてくれているのかもしれない。大柄な見かけと普段の行動からはわかりにくいのが、実質解散状態のスピカで唯一居残った彼女には情が深い一面もある。

「あら、私は気になるわね。リギルの事がわかれば対策になるかもしれないし」
「ハッ、お前リギルとやりあった事ねえじゃねえかよ！」

「そういう貴方だつてそうじゃない！」

「ああ!」「何よ!」

いつも通りに騒ぎ始めるダイワスカーレットとウオッカの言い合いを意識の外に放り投げ、改めて眼前のスペシャルウィークに戻す。純真な眼差しを向けられたままだった。可愛い。

「ううん……どうした物かしら……」

他ならぬスペシャルウィークの頼みである、これが余人ならば過去の事として、そして今の走りと違いすぎる事を理由に、考慮せずに断っていただろう。

「スズカー、言わなくていいぞー。それにスぺもスぺだ、あんま他人の言いたくない事を聞くような野暮な事すんなよー」

まるで念を押すようなゴールドシップの声に振り向くと、碁盤の上から将棋の駒が飛び、マツクイーンに当たる前に髪を払った彼女の手が駒を弾き返す。

「ばるうううす! 目があ! 目がああ!」

叫び声を上げながらのたうち回るゴールドシップを見る。後半こそいつものじゃれ合いになっているが、彼女なりに心配してくれているのがわかる。

それを察したのか、スペシャルウィークはシュンと耳と尻尾を垂らしてしまった。

「すみません、スズカさん。あんまり良いことじゃなかったですね……」

「いいのよ、スぺちゃん。ただあまり参考にならないかなって」

「そうなんですか？ 確かトレーナーさんがスピカに誘ったんですね？」

「それはそうなんだけど……」

言葉をきつて、考える。スペシャルウィークには悪いが、ここはゴールドシップの意を汲むべきだろう。

「ええと……スペちゃんはいつもレースは足を溜めて、どちらかというと中団、後方からが多いわよね？」

「ん？ そうですね……トレーナーさんからは気持ちよく走ればそれで良いって言われてますね、あ、そうかスズカさんは……」

「そう、私は逃げ、と言われる走り方よ。だから参考になるとはあまり思えないのだけど」

「そうですね……」

ウマ娘の走り方は、大別すると四種類が存在する。

レースの前方から逃げ、先行、差し、追い込み。

トレーナーはウマ娘を見て、どのように走らせるのが良いか、常に考えている。だがしかし、レースの理論として「もつとも勝率の安定する走り方」という経験と統計というものは存在する。そして多くのウマ娘たちは経験と、より良いトレーナーの目に止まるための独学として、そういう走り方を選択する。

「スペちゃん……もつとも勝ちやすい走り方って知ってる？」

6

オントロジー

著：凡用人型兵器

3 for long!

昔のこと。

ある日、レース教室に来たら、友達が一人辞めていた。

「一緒にトレセン学園に行って、いっぱいレースしようね」と約束していた子だった。

彼女は私より足が速かった。

彼女が辞めたおかげで、私は教室の推薦枠に入ることができた。



私はよく「ぼんやりしている子だ」と言われる。

私もそう思う。

世の中には考えることが多すぎるので、それを全部考えていたら、それだけで一日が終わってしまう。

だったら、ぼんやりしている方がいい。

子供の頃、友達にそう言ったら、「ミークちゃんらしいね」と笑われたことがある。

これって褒められたんだろうか。今でもよく分からない。

皆はきつと、そうじゃないんだろう。私はきつと、他の人より考えるのが下手なんだと思う。苦手なことを、わざわざする必要もない。そういうわけだ。

そうして今日も昼休みにぼんやりしていると、廊下で人とぶつかってしまった。

「あつ、ごめんなさ……」

小柄なその子は私を見上げて謝りかけたが、私の顔を見て驚いたように、もしくは傷ついたように顔をゆがめると、振り返って走って行ってしまった。

「……あ」

私もごめんなさいって言おうとしたんだけどな。

あの子の顔には見覚えがあった。最近別のどこかで見たような気がするけど、たぶんクラスメイトだったと思う。ええと……なんとカリズム……フルート……シンバル……トランペット？ トランペットリズム。確かトランペットリズムだ。話したことはなかったと思うけど、嫌われていたのかもしれない。

「ごめんなさいね」

知らない声でしたので振り向くと、スーツ姿の女の人立っていた。女の方は、私でも分かるくらいにはつきりと疲れて、そして落ち込んでいた。女の方は……あの子のトレーナーなんだろうか、ゆっくりと息を吐いて、力のない声で続けた。

「あの子を許してあげて」

「……？ はい」

「ありがとう。これからも頑張つてね」

そうして女の人も行ってしまった。一人残された私は、よく分からないまま、教室に戻ることにした。

「クラリネットリズム、さつき退学届け出したって」

「そうなんだ……」

彼女の事情は案外すぐに分かった。ついでに正しい名前も分かった。似たような名前が多いから仕方ないと思う。

「去年、クラシックで結局勝ちなしたったもんね。やつぱり厳しかったのかな……」

「ブレーンって同じチームだったよね、チーム・アケルナル」

「うん、最近だいぶ悩んでたみたいで、次のレースは絶対に勝つ、って言ってたんだけど……」

ブリーズブレーン（確かそんな名前）はそこで言葉を区切ると、席に着いた私にちらりと視線を向けた。どうしてこちらを見るのか分からなかったので、私が首をかしげると、彼女は目を伏せて視線をそらした。その表情は、さつきのクラリネットリズムや、そのトレーナーと似ているように思えた。

私はまた何か間違えたんだろうか。心当たりを探ってみようとしたけど、昔のことはどうもぼんやりとしか思い出せなくていけない。

「ねえブレーン、クラリネットってリズム家でしょ」

「うん。前は何人も重賞取った家らしいけど、最近はメジロ家とかに比べるとね……それで、ほら、あの子ってジュニア級でデビューから三連勝したじゃない。だからこれは久しぶりに行けるぞって、一族の期待的なのがあつたみたい」

「うわっ、それ辛いやつだ」

「これで今年四人目かあ。シニア級に入ってから多いね」

ブレイブリーコウとイミディエイト（割と自信がある）がため息交じりに言う。彼女たちはクラスメイトの退学を悲しんでいるみたいだったけど、どこか「仕方ないよね」と諦めているようにも聞こえた。

クラスメイトが減るのは、特に珍しいことじゃない。

ここ、トレセン学園、そしてトウインクル・シリーズは、その将来を期待された、全国でもトップクラスのウマ娘ばかりが集まる場所だ。どのウマ娘も、地元のアマチュア大会やレース教室では負け知らず、おそらく地方シリーズなら敵なしの、天才と呼ばれた実力の持ち主。それでも、一回のレースで一着は一人だけ。

私たちはその度に、ため息も涙も心の中にしまい込んで、笑顔でバックダンサーをする。次こそは、と思いつながら。

そして、思えなくなった子から、辞めていく。

7

空の名前

著：藤村流

3 for long!

これは、名前を刻むための戦いだ。

セイウンスカイという名前を、遥か未来に届けるための。

私が、ここにいたという証を残すための。

たった、それだけの物語だ。

風が吹いている。草が頬を撫でている。

寝転がっていると青空に押し潰されそうになって気持ちがいい。空しか見えないのは何も見えないのと同じことだ。でも綺麗なものをずっと眺めていられるなら、何も見えなくなってもそれはそれで幸せなのかもしれない。

「……おなかすいた」

お腹を擦りながら、そんなどうでもいいことを考えていた。

お昼過ぎ、ちよつと早めに食べたご飯はやつぱりちよつと前に消化されていて、これから晩ご飯までどうしようかな、と思いながら草むらをごろごろしている。

走りたい。できることなら走りたい。

でも脚の調子がそんなに良くなって、怪我自体は完治しているはずだけど、トレーナーからは念のために静養するように言い渡されている。困ったなあ。トレーナーを困らせるのも本意じゃないから、今はただただ過ごしている。思えば走りすぎが良くなかったのかも。自分がそ

んなに頑丈な身体じゃないのは知っている。どんなに走っても怪我しない子たちが羨ましい、
と思ったことがないと言えど嘘になるけど。

「……うん」

目をつむる。

そこは青空から一転して真っ黒に染まっていて、何にも見えないのはやっぱりしんどいなあ
と思わざるを得なかった。しょうがないから目を開けると、めいっぱいの青空が映るはずだっ
た視界の中に、見たことのある女の子が入り込んでいた。

「あつ。フラワーだ」

小さくて可愛い女の子——ニシノフラワーが、驚いて身体を起こす。少し気の毒だったけど、
大人しい私を見せ続けるのはちょっと癪だった。弱い自分を、と言った方が適切なんだろうけ
ど。

「ご、ごめんなさい！ 起こしちゃいましたか……？」

「いやあ、別に寝てなかったから大丈夫だよ。風が気持ちよくてねえ、つつい寝転んじゃう
んだよね。ここ」

「そう……ですね。私も、この場所は大好きです」

いつか、フラワーが落ち込んでいた時に、この場所を教えてあげたことがある。彼女がここ
を好きでいてくれたことは、素直に嬉しい。花の咲かない時期であっても、風も心地よく、日

当たりも見晴らしも良いから、何もない時もよくここに来る。

そうして、どうにもならないことをよく考える。

「……スカイさん？」

「んー？」

フラワーはどこか不安げだった。他人の機微に敏感な女の子だから、私のもやもやを汲み取ってしまったのかもしれない。だとしたら、申し訳ないことをした。私の気持ちなんて、汲んだところでどうしようもないものばかりなのに。

「何か、悩み事が——」

「ないよ」

しまった。失敗した。

これじゃ、絶対に他人に言えないような悩みがあるって言ってるようなもんじゃないか。

「でも……！」

ほら、フラワーが完全に世話焼きモードに入っちゃったじゃないか。こういうゾーンに入った時の彼女も好きだけど、今はあんまりタイミング的によろしくない。

どうしたものか、ひとまず目を閉じてみる。フラワーは何度か私の名前を呼んで起こそうとして、私が頑として起き上がらないと悟ると、今度は隣に座って耐久戦に突入した。

いいのかなあ、スタミナは私に分があると思うけど。

でも、付き合ってくれるのは嬉しい。何も解決しないけど、傍にいてくれるだけで救われるものもある。それだって、本当は気休めにしかないことも知っているけど。

いいじゃないか。別に、気休めにしかならなくなつて。ほんの少し、歩き出す力になればいい。

そこから先は、どう足掻いても、私の話だ。

「……」

「……ぐー」

「……眠ってます？」

「……寝てるヨー」

くすつ、とフラワーがちよつと笑つた。

そうこうしているうちに、風が徐々に冷えてきて、まぶたから得られる光も少しずつ薄くなつていく。空に雲が掛かつてきた証拠だ。

「……あの、雨が」

ぽつり、ぽつりと、雨粒が肌を叩く。これは夕立の予感。

意地になってそのまま寝転んでいてもよかつたけど、それにフラワーを付き合わせるのも可哀想だ。しゅぱつと素早く起き上がって、その勢いに驚いているフラワーの手を取って走り出す。

8

秋華散る淀、咲く想い

著：美鈴まさき

3 for long!

降りしきる小雨が身体を濡らし、纏う勝負服は重さを増していく。数値としては微々たるものだが、身体に纏わり付き不快感を増す衣装は、極限の動きの中では確実に動きを阻害する拘束具となる。

幾分か緩くなっている地面もまた体力を削る敵となり、一完歩毎の歩幅を縮めようと牙を剥いている。

顔を打つ水と土は視界と集中を奪い、ともすれば脚を持ち上げる気力までもぎ取ろうと叩き付けてくる。

けれど、それはこの場を走る全ての者に等しく与えられたコンディション。故にハンデと捉えることしかできないのなら二流以下。あの方、私が感銘を受けたウマ娘なら、きっとそう笑って言い切るだろう。

だから、彼女に倣って私も顔を上げ、前を見据える。

最終コーナーに入り、先頭の脚が無くなり後退し始めたこの瞬間を勝負所と、身を沈めてスパートをかけた。

ここ数ヶ月、体調不良が長引いていたため、レースへの調整は決して順調とは言えなかったが、自慢のパワーはそんな杞憂を易々と振り払い、身体を前へと押しだして、狙い通り先頭で直線に向かわせる。

とはいえ阪神コースには直線に坂があり、最後の関門として私の前に立ちはだかっていた。

「仁川の坂がこんなにキツイとは、今まで思いもしませんでしたわ」

デビュー戦はもつと強い雨の中で、バ場も不良だったがものともせず、続くレースと共に連勝を刻んだ阪神コース。だけど、人気と実力を共に携える一騎当千のウマ娘が覇を競う最高峰のレースを支える舞台に相応しく、勝者と敗者を飾い落とそうと容赦無く苦しみを与えてくる。

思わず呟いた弱音。けれどすぐに口を結んで、不快に張り付く髪と一緒に腕で退け払う。

数々の悪条件、そしてこの坂さえも全員に課された平等の試練。キレ味を奪う重たいバ場で、状態の良い三分所の経済コースを先頭。位置取りは完璧。であれば迷わずに駆け上がるだけ。

「今度こそ、文句の付けようもなく勝ちきって見せますわ」

気合いと、残りの力を脚に込め地を蹴り出す。

最高速に乗せる為のパワーはしかし、その全てを前だけに向けるものではなかった。

「っ!？」

気負いすぎたのか、雨で濡れた芝が滑ったのか、はたまた両方か。原因は何にせよ、全力で踏み込んだ右足が僅かに流れた。そして同時に走る鋭い痛み。

よるめいた身体を左足で食い止めるが、再度下ろした右足は私の制御を離れ暴れ狂う。

「こんなことで止まる、訳には、いかない、のにつ……くっ!」

歯を食いしばり、脚を焚きつけるが、誇るべき筈のパワーは却って右足を痛めつける刃とな

つてスピードを切り落とす。

「私は……勝たなければ、ならないのに……」

気力と根性で坂を越えるが、現実の前には慈悲は無く。

ひとり。ふたり。私とゴールとの間に背中が割り込み、順位を奪っていく。

「……ああ……」

その姿を追うこともできない私の頬を濡らしていたのは、はたして雨だけだったのか。

走り終え、引き揚げていくウマ娘達を、ぼうと見つめる私に残されたのは、自分の番号が記されていない電光掲示板の表示と、痛みが止まらない右足であった。

〃 〃 〃

木枯らしが吹き、紅葉も始まりかけてきた秋。だんだんと下がりゆく気温に反するように、トレセン学園の熱気は盛んになっている。

秋から年末にかけては、数あるレースの中でも最も格の高いグレードレースが集中しており、競走ウマ娘達にとって一番力が入る時期であるからだ。

出走条件を満たしている常連の古豪は栄光を掴むための研鑽に励み、まだ道途中の者達はその舞台に至る為、前を向き駆けていく。勿論デビューを待つフレッシュヤーズも、先達に負けず劣らずの希望と野望を心に宿し、来たる日に向けてその身を鍛えている。

当然、ウマ娘を担当するトレーナーや日々の指導を行っている教官陣、彼等彼女等をサポートする職員達、そして、URAの成功によりかつて無いほどの盛り上がりを見せるウマ娘サークルの中心である、秋川理事長を初めとする関係者諸兄。学園に関わるほぼ全ての存在が、それぞれの目的へ向かって情熱を燃やしているのだ。

そんな風物詩と言える光景を、どこか別世界のように私は感じていた。

身を包む制服が示すとおり、私も学園のウマ娘であり、この空気も当然知っている。忘れられるはずがない。ちょうど一年前、私はその中心にいたのだから。

同期の娘達よりも誕生日がかなり遅い私は、成長の面でも遅く、レースデビューが可能になったのはクラシック期になってからだった。

競走ウマ娘にとってそれは致命的とも言える欠点。出走可能なレースが少なくなり、必然的に勝ち上がる可能性が低くなる。これは場合によっては夢を諦めることを告げられるようなもの。実際、プリンセスを夢見ていた私は、ティアラ路線を進みたいと思っていたが、最短のスケジュールを進んでも一冠目の桜花賞への出走条件を満たすことはできなくなっていた。

勝ち負けどころか、挑戦することさえ許されない。それならば走る意義は何処にあるのか。

9

194's STARDUST

著：紫々

3 for long!

目の前を一筋の流星が駆け抜けていったあの日のことを、私は今もはっきりと覚えている。周りとの駆け引き、刻一刻と変わる展開、そんな全体の流れを読む術をまだ知らない、がむしやらに走るだけで精一杯といったウマ娘たちの中でただ一人、彼女だけが「レース」を走っていた。

地を這うような前傾姿勢で、太陽の光を受けて金色に輝く髪と尾を風に流して。

その時は駆け引きも展開も関係ない、全てを力でねじ伏せるといったナリタブライアンの二着ではあったけれど、思えばあの時、私は本当の意味でマヤノトップガンというウマ娘に出会ったのかもしれない。

そんな衝撃的な出会いは、すぐに刺激的な日々へと変わっていった。

『トレーナーのお姉ちゃんだから、トレーナーちゃんだね！』

『……お兄ちゃんだったら？』

『トレーナーのお兄ちゃんだから、トレーナーちゃん！』

『……なるほど？』

どんなことでも見ただけで正解に辿り着いてしまうというマヤノは、それ故に一度知ってしまったものや簡単に答えがわかるものに対してはすぐに興味を失ってしまう、というような娘だった。

トレーニングや勉強はわかっていることの繰り返しで楽しくないという彼女に、また何か違

った意味を見出せるようにあれこれ考えてはそれを伝え、そんな中で機嫌を損ねてしまつ時には色んな世界を見せてあげようと一緒に出かけたりもした。まあ大体最後はいつもレース場に行っていた気もするけれど、なんせトレーナーとウマ娘なのだから、きつとそれが二人にとつてのベストスポットだったのだ。決して私がデートコースの引き出しが少ない女だったという訳ではない。マヤノも喜んでたし。たぶん。絶対。

とはいえ、そんな天才的なセンスと、それを実践するだけの身体能力に恵まれた彼女であるからには、当然デビューから連戦連勝——といかないのがレースの、トウインクル・シリーズの難しいところなのだろう。

ひとえに身体能力といったところで、なにも最初から身体が仕上がっている訳ではない。キラキラした大人に憧れる、まだまだ年相応の身体では、どれだけその動かし方が「わかった」ところで、身体そのものがついてこない。

トレーニングをしてこなかった分の調整の遅れ、加えて成長期の脚に負担をかけまいと選んだダート路線。

負けが続く中で、それでも新しい発見に目を輝かせることがあれば、わかりやすく不満を爆発させることもあった。

『もうやだ、走りたくない。今日はデートしかしませーん!』
それでも最後にはまたレース場に行つて、走るウマ娘を見て「あんな風にキラキラしたい」

と言えたことが、もしかしたらマヤノの本当の才能だったのかもしれない。

たとえ出遅れたとしても少しずつ、でも確実に。脚元もしっかりとして、芝のレースを走るようになって。マヤノよりもずっと先にデビューした他の娘たちが、あるいはマヤノと同じレースでデビューした娘がクラシックやティアラ戦線で華々しく活躍するその裏で、残る一冠たる菊の舞台への準備は――

「……ナーちゃん、トレナーちゃんってば！」

声と一緒にガクガクと肩を揺さぶられて、私はハッとして目を開いた。

ここがどこか、というより先に愛らしい天使のような顔が視界に飛び込んできたので、一瞬天に召されたのかと思ってしまった。

「あれ、マヤノもう戻ってたの？」

「ふーんだ！ マヤの出迎えもしないでお昼寝してるトレナーちゃんには教えてあげないんだからっ！」

レース前の控え室。出走に向けた検量と、G1の舞台なので勝負服への着替え。そこへ送り出したのはつい先ほどだと思っていたのに、時計を見ればなるほどマヤノが怒るのも無理はない時間だった。

七度目。

マヤノと一緒に迎えるG1レースもそんな数になってきたというのに、やっぱりまだどうし

たつて緊張してしまう。今回は特に、と言えるかもしれないけれど。

「別に寝てた訳じゃないよ」

座っていた椅子から立ち上がって、よしよしと宥めるように頭を撫でる。でもそれだけではまだまだ許してくれないようで、マヤノがぷくーと頬を膨らませた。やっぱり天使かな？

「ちよつと考え事をね」

「考え事？ ……あーっ！ また他の娘のことでしょー。トレーナーちゃんの浮気者ー！」

言いながらマヤノがぼかぼかと叩いてくる。何故だか一瞬間の中に選択肢のようなものが見えた気がしたけれど、私が選ぶ答えはいつだって一つであつて、それが唯一の真実だ。

「マヤノとのこれまでのことをね、振り返つてたの」

途端、手が止まつて「えへへ」と破顔一笑。ふにやふにやになったマヤノがそのままもう一歩前へ。自然と抱き止め、抱きしめられる形になる。

「マヤのこと考えてたの？」

「マヤノのことだけ考えてたよ」

選択肢なんて選ぶまでもなく、本当に私はいつだってこの小さな撃墜王のことばかり考えている。キラキラな大人になりたいという彼女の願いを叶えるために。そしてこのトゥインクル・シリーズの歴史に彼女の名を刻むために。

けれどそんな私の想いなど知つてか知らずか、マヤノは「きゃ☆」と黄色い声を上げてぐ